農　大　情　報

平成24年12月号
編集発行：愛知県立農業大学校

東北３県の農大生と交流

農大祭の前日、岩手・宮城・福島の３県からそれぞれ３名の農大生が到着しました。早速、学生全員参加の交流会が開催されました。

交流会では、映像を交えて震災当時の各農大の状況や震災復興のためのボランティア活動などが報告されましが、その生々しい体験談から被害の実態を改めて知ることができました。学生は、今後とも支援を続けていく思いを強くしていました。

（山田勝）

新聞　2012年（平成24年）12月1日（土曜）

被災地の窮状切々と

東北３県の農業大学生が報告

東日本大震災で被災した岩手、宮城、福島県の農業大から学生たち９人を招き、現地の窮状を語ってもらう報告会が30日、岡崎市美合町の愛知県立農業大学校岡崎キャンパスであった。受け入れ側の学生200人が「震災から１年９カ月たっても、復興はまだ緒に就いたばかり」といった話に耳を傾けた。（梅本秀器）

県立農業大学校岡崎キャンパス

岡崎キャンパスで一日自治会長の佐々木秀彰さん（２）は「卒業記念パーティーの改装直午前十時から午後二時まで開催される「農大祭」の準備に追われる学生たち―いずれも岡崎市美合町の県立農業大学校岡崎キャンパスで

辺祥代さん（二）は「校内の牧草地で生産できなくなった」と語った。宮城県農業大一年の渡辺さんは「震災直後に地震が起きたと思い、もしも講堂での卒業式の最中だったら、天井がすべて落ちたため大きな被害になった」と振り返った。

福島県農業短大二年で学生自治会長の鈴木助さん（二）は「原発事故後の風評被害や作付け制限などで地元は大打撃を受

交流の状況を報じた新聞記事

農大祭２０１２　大成功

12月１日（土）、農大祭が例年にも増して盛大に開催されました。

今年は、快晴で風もない絶好の天候にも恵まれ、開始時刻の10時前から多くの来場者がお目当ての直売ブースの前に行列を作っていました。

東日本震災被災地の３県農大生のブース出展など、農大祭実行委員会の新たな取り組みや自主的な運営により学生は皆活き活きとしていました。

どの来場者も両手いっぱいに野菜や花などを買って家路につかれ、農大祭を大いに楽しんでいただいたようです。（山田勝）

県民公開講座（冬の果樹管理）を開催しました

一般の県民の皆さんを対象とした県民公開講座「冬の果樹管理－上手な剪定のコツ－」を12月４日、13日と２回に分けて実施し、20代から70代に渡る幅広い年齢層から、合わせて58名の受講をいただきました。

講師は本校の元農学科長の長縄光延氏にお願いしました。前半に講義、後半に剪定の実演を行う構成で進められました。

講義では、果樹管理の基本である落葉果

樹、常緑果樹の違い、苗の植え付け方、果実の付け方等の説明がありました。その後、果樹園へ移動してカキ、ウメ、イチジク、ブドウの剪定の実演を行いました。寒い中ででしたが、皆さん熱心に受講していました。

講師の豊かな知識と経験にもとづく分かりやすい説明に、各40分の講義と実演も受講者には短く感じられて、次回はもっと時間を長くしてほしいという声が多くありました。また、カキやミカンなど種類別に研修を実施してほしいといった要望や病害虫防除、土作りなど多くの質問が出されましたが、丁寧な受け答えに疑問が解消されたと好評でした。　　（稲吉金一）

県民公開講座でゆべしとゆずジャム作り

12月５日、今が旬のゆずを使った中山間地の伝統食であるゆべしと果肉を使ったゆずジャムの加工実習を行い、26 名が受講しました。ゆべしは、ゆずの上部を切って、果肉をスプーンでくり抜いたところに、味噌、砂糖、落花生、ごまを練り合わせたものを詰めて蒸し、春まで乾燥させて作ります。ほとんどの参加者がゆべしを作るのは初めてでしたが、講師の寄田種子氏から丁寧な説明があり、ゆべしの作り方や利用法が理解されました。ゆずジャムは、取り出した果肉に砂糖を加えて煮詰めて出来上がりです。ゆずを余すことなく利用でき、ゆずの香りを堪能できた研修でした。（玉越千賀子）

蒸し上がったゆべし

青年農業者リーダー研修を開催

愛知県４Ｈクラブ連絡協議会との共催で、12月11日、「青年農業者の提言及び技術交換」と題した研修を実施しました。参加者は４Ｈクラブ員26名と本校の学生139名、他17名でした。

この研修では、４Ｈクラブ員が、日頃抱いている農業への思いについての意見発表と、実際に取り組んだプロジェクト発表の二部門について、内容、発表態度、効果などを審査しました。意見発表の部門では、大府４Ｈクラブの蟹江陸孝氏の「自分の主張」が１位（知事賞）となりました。発表態度が素晴らしく、どうしたら効果的に自分の主張ができるかをアピールしました。

プロジェクト発表部門の１位(知事賞)に輝いた新城４Ｈクラブの安形真氏の「白菜キムチによる発酵白菜の有効利用について」は、害虫被害や規格外の収穫物の有効活用として、キムチ加工を行ったことによる販売率の向上、発酵技術、消費者嗜好などを捉えた発表が、今後の農業経営の改善につながるものと高い評価を得ました。

この研修では、本校の学生も賞（ギャラリー賞）の選考に加われることもあり熱心に聞き入っていましたが、何より学生にと

って農業の先輩である４Ｈクラブ員が日頃何を考え、どういった農業に取り組んでいるのか感じる良い機会となりました。

（稲吉金一）

一位となった蟹江氏の発表

「派遣実習」コミュニケーション能力向上演習を開催しました

12月17日（月）に教室棟大教室で教育部農学科１年生を対象に「派遣実習」コミュニケーション能力向上演習を開催しました。

スキルごとの実習

派遣実習は、先進農家等で優れた知識・技術を体験させることを目的に、２年生の９月上旬から10月中旬まで40日間実施する専門科目です。例年、派遣実習を終了した２年生や派遣先から、実習を行う上でコミュニケーションをしっかり取ることが重要であるという意見が多く出されます。

そこで、来年度派遣実習を行う１年生がコミュニケーションの重要性に『きづき』、その能力向上に自ら取り組むきっかけとなるよう、この演習を企画しました。

講師にキャリアデザイン総合研究所代表の佐々木史光氏をお迎えし、「コミュニケーションの意味とポイント」「基本的な考え方」、自己紹介・コーチングのスキル等の演習により、コミュニケーションの基礎を修得しました。

講師の軽妙な語り口調とスキルごとの実習が３時間の演習時間を短く感じさせました。始めは恥ずかしがって言葉の出なかった学生も、終盤に近づくにつれ、熱心に取り組む姿が見られました。　演習終了後に行ったアンケート調査では９割を超える学生が参考になったと回答し、「理解しやすく、学んだことを活用したくなりました。」「自己紹介に対する考え方、見方が少し変わった。」「話が苦手だったので、将来役立てたいと思う。」「派遣実習の時に今日の演習を思いだして実践してみたい。」といった感想が寄せられました。

（新井和俊）

農学科の意見発表会を行いました

12月18日に意見発表会を開催しました。

最優秀賞の中村昌宣君の発表

この行事は、本校の学生が一堂に会し、日頃の学習成果を交換・交流し相互に研鑽を図るとともに、「平成２４年度東海・近畿ブロック農業大学校学生研究及び意見発表会」（以下「ブロック発表会」という。）へ出席する代表者を選出することを目的としています。発表内容は、本校における実践学習、我が家の農業経営や生活、地域の農村環境、就農等について、自らの学生生活を通じ日頃考えていることや想い等に関するものです。

行事の運営は、学生会の１年生役員があたりました。校長先生はじめ教職員、全校学生でいっぱいになった大講義室の中で、司会を担当した学生会の菊池陽貴君の発声で会がスタートしました。

発表者は各専攻から選出された１年生８名で、発表は張り詰めた空気の中で進められました。いずれの発表者も、日頃自分が感じたり考えていることを自分の言葉でしっかりと伝えていたことが印象的でした。それぞれの発表が終了した後に、会場から意見・質問が積極的に出されていました。

審査は､校長先生はじめ５名の職員が｢課題設定の背景と動機｣｢意見・提言の内容｣「発表方法及び態度」の審査基準に基づき行い、最優秀賞１名、優秀賞２名が次のとおり選出されました。

【最優秀賞】

「伝える繋げる農家になる!!」

露地野菜専攻　中村昌宣

【優秀賞】

「感動と決意」

果樹専攻　竹内大貴

「今までの自分、これからの自分」

作物専攻　石川直幸

最優秀賞を受賞した中村昌宣君は、１月21日から22日まで岐阜県立農業大学校で開催されるブロック発表会に本校代表として出席します。是非とも、持ち前の優れた話術で自分の強い想いを伝え、全国発表会への切符を手にしてもらいたいと思います。

（新井和俊）

農業者育成支援研修が閉講

国の新規就農総合支援事業により、本校では７月から農業者育成支援研修を開始しました。６か月の研修期間を終了し、12月27日に成果発表会と閉講式を行いました。

この研修では、新たに農業を始める人を対象に週３回、露地野菜作の実習と講義を行ってきました。受講者は16名で、多くは定年後に兼業農家を継いで就農する意欲を持っている方々でした。

成果発表会では、「理論を知らずに見よう見まねでやってきたが、この研修で学んだ方法で近所でも評判になる素晴らしいナスが出来た」とか、「耕耘機の仕組みが分かり､効率的な作業ができるようになった」など、研修で学んだ成果や感想が聞かれました。

熱心な発表と意見交換で予定時間を大幅に超えるほど活発な発表会となりました。

また､今年は、７月からの研修でしたが、来年は春夏作の研修を含め年度早々の開講を希望する意見が多く出されました。

（土屋明彦）